

## 初心者コーナー

## ODAと連携した海外インフラ投資事業

## はじめに

海外支援室でお話をさせて頂く多くの方々から、ODAと連携して海外でインフラ投資事業ができないのかというご質問をよく頂きます。そこで、今回はどうすればODAと連携したインフラ投資事業が海外で可能なのかを投資事業サイドからポイントをお示ししたいと思います。

## 1. 海外インフラ投資事業のスキーム

以前にインフラ投資事業のスキームをご紹介致しました。大別して、BOT、BTO、BOOと言ったGreenプロジェクトとLO等のBrownプロジェクト（維持管理のみ）があり、その違いはインフラ本体を建設（Build）を含むかどうかでした。最近では、老朽化したインフラを補修して運営管理をするROT（Rehabilitate-Operate-Transfer）と言ったタイプも出てきていますが、既存インフラを借り受けて、質的改良を含まず保全的措置だけをする場合はLOですし、質的改良を含む場合は、質的改良分はBTO、既存インフラ部分はLOですので、BTOとLOの混合型になります。

欧米のコンセッション事業を世界中で展開している企業等では、LOを中心に事業展開をするBrown型指向企業と、自社以外が建設に携わらないインフラは運営管理しない（LOは行わない）とするGreen型指向企業に大別できます。

## 2. 汎用可能なODAとの連携の事例

顧客ニーズ、投資家、分野などにより、そうしたスキームとODAとの連携方法は多様な可能性があります。

以下に3つの汎用的な例を示します。

## (1) 上下分離タイプ

インフラの建設をODAで行い、そのインフラの運営管理を投資事業のLOとして行うものです。例えば、港湾のふ頭整備をODAで行い、ふ頭の運営管理をLOで行うことなどです。

(2) VGF（ヴァイアビリティ・ギャップ・ファンディング）  
BOT事業やBTO事業などで、料金収入だけでは採算性が確保できない場合に、円借款を通じてSPCに資金的な支援を行うものです。

## (3) ODA対象インフラ活用型

ODAで整備されるインフラを活用して、民間事業者が独自に投資事業を展開するものです。例えば、幹線道路をODAで整備し、その沿道で「道の駅」を展開する投資事業を行うことなどです。

これらを組み合わせるなど多様な連携方法の可能性があるのですが、実際はなかなかODAとの連携案件が多

くは出て来ていないのが現状です。その課題の主なものを挙げてみると、次の3点になります。

- ① ODAはG2G（政府間）の事業で、一方、投資事業は民間企業活動です。そのために、両者が時間的に連携して動くことが困難な場合が多く見られます。
- ② 投資事業の投資家がODA事業の準備段階の早い段階で投資判断ができる情報が入手できないことから、投資家が関心を持ち得る案件でも連携が困難になっています。
- ③ 投資事業の採算性が悪化した場合に、投資家は常に事業からの撤退の可能性を検討する必要がありますが、ODAでは撤退を想定できないため、投資家はODAとの連携を検討し難しくなっています。

## 3. ODAと投資事業の連携のポイント

こうした課題を克服するためには、ODA関係者の投資事業への理解が大前提であることは言を待ちませんが、特にODA関係者と投資家が資本の「時間価値」を異なった捉え方をしていることに留意する必要があります。

それを前提として、次の3つのポイントを押さえれば、ODAと投資事業が組み立てやすくなるのではないかと考えます。

- ① ODAが投資事業の意思決定の迅速性に対応できること。（ODAの手続きが往々にして冗長になるため）
- ② ODAのF/S段階で投資事業を組み込めること。（投資家が投資判断できる情報を入手できるように）
- ③ ODAのF/S段階で、情勢変化に対応して投資家の撤退を想定すること。（ODA事業が何らかの事情で大幅に遅れ、投資家が撤退せざる得ない場合への対応を準備しておくため）

## おわりに

政府が2015年2月10日に決定した「開発協力大綱」の閣議決定文では、ODAは「我が国政府及び政府関係機関によるそれ以外の資金・活動（ODA以外の公的資金（OOF）、国際連合平和維持活動（PKO）等）や開発を目的とする又は開発に資する民間の資金・活動（企業や地方自治体、NPOを始めとする多様な主体による資金・活動）との連携を強化し、開発のための相乗効果を高めることが求められる。」と位置付けられ、「多様な資金・主体と連携」することへの期待が謳われています。開発大綱の趣旨に沿って、ODA関係者が一層海外でのインフラ投資事業との連携に取り組み、多くの採算性の良い投資事業が組成されることを期待致しております。

（審議役、海外支援室長 藤森祥弘）